

## Special Essay

### 震災に思う

循環器病センター

上野 高史

理化学研究所の次世代スーパーコンピュータ「京」が計算速度で世界一に選ばれたとのニュースを見た。日本にとっては久々のうれしいニュースである。民主党が行ったいわゆる事業仕分けで「2位ではだめなんですか？」と仕分けされたあのコンピュータであるから痛快である。しかしながら、予算が少なくなっても世界一になったのだから事業仕分けが適切であったと取れないことはないが、すごいことである。日本の技術力、開発力は世界でもトップレベルにあると聞かされ続けてきた。今回おこった東日本大震災によって東北地区の産業が一時停止した結果、世界中の自動車産業や電子機器の生産がストップしてしまったそうである。このようなことが起こって初めて東北地区が世界に貢献していたことを知った人も多いはずである。一方で、世界一進んでいたはずのロボット技術は原発事故現場では他国に後れを取ってしまった事実もある。日本人のこだわりが多く、技術を開発したもののプラクティカルという面では現場を見ていなかった可能性があるのかもしれない。いずれにしても被災地の早期の復興を願うばかりである。

医療という点においても今回の震災を機に多くのことを感じ学んだ。数名の知人が被災地に飛びボランティアとして活動した。彼らの多くは自らの無力さに苛まれていた。電気がない、医療機器が使えない状況かつ薬も不十分な場所で聴診器一本では何もできなかったのである。自らを省みても30年前に必死に身に着けようとした診断学は多くの医療機器の進歩と普及の陰であの頃ほど熱心には行わなくなってしまっている。聴診器で心臓の雑音を聞き分け、どこの弁がどのように悪いと判断し、その後その当時の最新機器で自らの診断が正しかったなどという喜びはずいぶん遠い昔に失ってしまったようだ。今ではいかに効率よく患者さんの数をこなすかを医術としてしまっている。もう一度原点に戻る時が来たような気がする。

最近、医史学で有名な順天堂大学名誉教授の酒井シズ先生の本に目を通して。その著書の中に登場する先人たちはどのような気持ちで初めての解剖体に向かったのだろうか。今の世にあるような診断機器がない時にどのようにして病を診断し、治療していたのであろうか。その当時の診断なんてと侮るなかれ。我々はコロリの診断すらできないかもしれない。

ひょっとして彼らが被災地にタイムマシンに乗って現れたなら我々よりもっと患者が納得できる医術を見せたのではないかと考えると興味深い。

